

生きてきてよかった

伊藤 フサ子

わたしの夢は、学校のもんをくぐることだ。いちどせんきよで学校にいったが、だんさがあって、くるまいすでは中にはいれなかった。それから学校にいったことはない。いちどでいいから学校にはいって、中をみてみたい。そしてきょうしつでいすにすわってべんきょうしてみたい。

わたしは五人きょうだいの四ばんめに生まれた。のうせいしょうにまひだったため、生まれつきからだが不自由だった。父さんは子ぼんのうで、とくにわたしをかわいがってくれたそうだ。「おまえをじてんしゃのかごにのせて、よくていぼうをはしってくれたんだよ。」と母さんがいていた。

おとうとが母さんのおなかの中にいるとき、父さんはこうつうじこにあった。そしてそのことがげんいんでじさつしてしまった。その

ときわたしはまだ小さかったので、父さんのきおくはまったくくない。しゃしんにうつった父さんのかおしかしらない。あかちゃんだったわたしをだっこしている父さんのしゃしんがあったが、火じでそのしゃしんもやけてしまった。

父さんに死なれて、母さんは五人の子どもをかかえ、これからどうやって生きていけばいいのかとほうにくれた。大きくなってからきいたはなしだが、母さんは生きるきぼうをなくし、からだの不自由なわたしをのこして死ぬのはかわいそうだとかんがえて、わたしをつれてちかくの川にいき、いっしょに死のうとした。そのとき、とつぜん大きなこえでわたしがなきだしたため、母さんははっとわれにかえり、死ぬのをおもいとどまった。そしてわたしのためにも、みんなのためにも、がんばって生きていこうとけっ心したそうさ。

子どものころ、なんでわたしは学校にいけないのだろうとおもっていた。おなじ人間と

して生まれてきたのに、しょうがいがあることでくべつされるのが、すごくくやしかった。いつもなんでなののかかんがえていた。かんがえてもかんがえても、まえにすすまなかった。そとにでると「おまえなんか死んでしまえ。とか「そばによるとびょうきがうつる。」といわれていじめられた。石をぶつけられたこともあった。すきでびょうきになったわけでもないし、うつるびょうきでもないのに、なぜいじめられるのか、わたしにはわからなかった。わたしはそとにでるのがこわくて、いつもいえにいた。

母さんはぎょうしょうのしごとをしていた。やすむとお金にならないので、わたしをようご学校につれていくのはとてもむりだった。わたしもそのことがよくわかっていたのでだまっていたが、どうしても学校にいきたくて「なんでわたしだけ学校にいけないの。」と母さんをせめたことがあった。母さんはしばらくだまっていたが、「すまない…」と小さ

なこえでつぶやいた。わたしはこれいじょう
母さんに学校のはなしをしてはいけないとか
感じて、いうのをやめた。父さんがもし生き
ていたら、学校にいったかもしれないし、べ
んきょうをおしえてくれたかもしれない。そ
したらわたしの人生も、もっとちがっていた
かもしれないと、なんどもおもった。

なかのいい友だちは一人だった。その子も
からだがよわくて、学校にいったいなかった。
わたしはおとうととよくあそんだ。おとうと
が学校に行くようになると、学校からかえっ
てくるのがまちどおしかった。おとうとはと
てもやさしい子で、いつもわたしのために、
きゅうしょくのパンをはんぶんのこしてもっ
てきてくれた。おいしかった。おとうとは小
学生るときから、あさはしんぶんはいたつと
ぎゅうにゆうはいたつ、ゆうがたはしんぶん
はいたつをして母さんをたすけていた。おと
うとはじゅぎょう中にいつもいねむりをして
いたので、母さんは学校のせんせいからしご

とをやめさせるようにいわれたが、生かつのためにどうすることもできなかった。おさない子どもをはたらかせなければたべていけなかった母さんは、おやとしてつらかったにちがいない。わたしはずっといえにいたので、なるべくそうじやせんたくをして、母さんにらくをさせたいとがんばった。母さんのやくにたつのが、わたしにとってなによりもうれしかった。

母さんはまいあさ三じにリヤカーをひいていえをでて、ゆうがたの五じころにかえってきた。母さんはなんどかこうつうじこにっているのので、いえにかえってくるまではしんぱいでたまらなかつた。わたしはゆうがたになるといつも、とちゆうまで母さんをみにそとにでかけていった。そして母さんのすがたをみるとほっとして、さきにいえにかえってきた。母さんはよるもちかくのしょくどうで、ごはんたきやさらあらいのしごとをしていた。とにかくはたらきづめのまい日で、母さんが

ねているところをみたことがなかった。

そとにでるといやなことがおおかった。わたしは生まれつき足くびがまがっていたので、あるくときからだがゆれた。そんなわたしをみて、小さな子どもが母おやに「あのおばさん、どうしてあんなふうにあるくの。」ときいた。母おやは「わるいことすると、あんたもあんなふうになるよ。」といった。どうしてそんなことをいわれなければならないのか、くやくくてたまらなかつた。そういうことがあると、そとにでるのがこわくなった。人のしせんがすごくきになった。わたしは人まえにでたくないのので、いつもすみっこやかげのほうにかくれていた。

にいさんのけっこんがきまり、およめさんになる人がうちにあそびにきた。かぞくにしょうがいしゃがいることで、けっこんがだめになったらこまるとおもって、わたしはそのたびに犬ごやにかくれてじっとしていた。かなしくてみじめで、一人犬ごやでなっている

と、犬がわたしのなみだをなめてくれた。いまでもそのときのことをおもいだすと、なみだがあふれてくる。

にいさんはほうへいかんでけっこんしきをあげた。わたしもほうへいかにいったが、かいじょうにはいることはできなかった。わたしのせきはよういされていなかった。けっこんしきがおわるまで、わたしはかいじょうのそとのろうかで、一人じっとまっていた。ボーイさんがわたしのことをきのどくにおもったのか「おなかすいたでしょ。」と行って、たべものをそっともってきてくれた。ことしえんゆうじゅくのえんそくでほうへいかにいったとき、そのことをおもいだしてむねがいたかった。心のきずはなかなかきえない。

わたしたちのくらしはまずしく、なんどもひっこしをした。ながやぐらしてトイレや水どうがそとにあったときは、ふゆとくにつらかった。水どうがへやになくて、もらい水をしていたこともおおかった。とにかく水やト

イレではさんざんくろうした。

二十一さいのとき、ほうかでいえがもえてしまった。わたしたちかぞくは、それからあちこちをてんでんとしながら、小さなこうじょうのものおきのようなばしょをかりて生かつした。そのとき二ばん目のねえさんのけっこんがきまっていた。火じでなにもかもやけてしまい、きるふくもないままおよめにいかなければならなかったねえさんが、いちばんかわいそうだった。わたしたちがすんでいたばしょには、水どうもトイレもなかったのので、おおやさんのすんでいるところにいって水をもらい、トイレをかりて生かつしていた。ねえさんはそのころこうじょうではたらいていたが、やすみの日にユニフォームをせんとくしなければならなかった。きがねしながら水をつかっても、つかいすぎるとおおやさんにしかられて、ふべんでくるしかかった。さいていの生かつだったが、そんなたいへんなじだいをのりこえてきたおかげで、いまはつらい

ことがあっても、たいしたことなく感じる。
あのころにくらべたら、とてもしあわせだ。

わかいころは、生きているのがほんとうに
つらかった。じごくのようなまい日だった。

「なんでわたしを生んだの。こんなにくろう
するなら、このよにいないほうがいい。」と
いって、しょっちゅう母さんをせめていた。
夢がなかった。生きるもくてきがみつからず、
ただ生きていた。じぶんの人生をどうやって
生きていけばいいのかわからなかった。この
ままかぞくにめいわくをかけながら生きるの
もいやだし、一人で生きていくじしんもない。
からだの不自由なわたしをかかえ、くろうし
ている母さんのことをおもうと、じぶんがい
ないほうが母さんも自由になれるし、らくに
なるとかんがえて、ある日わたしはくすりを
のんで死のうとした。すぐにきゅうきゅうし
やでびょういんにはこぼれ、わたしはたすか
った。目をさますと、母さんは「なんてこと
をするんだ。おまえに死なれたら母さんはこ

まる。たのむからやめてくれ。」とはげしくわたしをしかった。そのときの母さんはほんとうにこわかった。いまでもそのときのかおがわすれられない。それでも死にたいというきもちはなかなかきえなかった。そのごも、川にみをなげて死のうとおもったことがなんどもあった。

そんなじょうたいだったので、わたしを一人でいえにおいておくと、またじさつされるかもしれないとかんがえた母さんは、しりあいのすすめもあって、しょうがいしゃのしせつにわたしをいれることにした。わたしもしょうだくした。めんせつにいくと、その中に市りつびょういんのせんせいがいて、わたしの足をみていった。「手じゅつすれば足くびがまっすぐになり、くつがはけるようになるよ。でも、いくらいしゃががんばっても、ほん人になおすきもちがないとだめだし、どりよくがひつようだよ。」

それまででかけるときには、母さんがひも

をつけてぬげないようにしてくれたサンダルをはいていた。どうしてもくつをはいてあるいてみたかった。いたみにたえられるかふあんだったが、わたしは手じゅつをうけるけっ心をし、ベッドがあくのをまった。

わたしはぜんぶで十すうかいの手じゅつをうけた。手じゅつ中、ぜんしんますいではなかったなので、なにをしているのかよくみえたし、おともぜんぶきこえて、ほんとうにこわくていやだった。なによりも手じゅつごに足がやんでたえられなかった。なんで手じゅつなんかすることにしたのか、とてもこうかいした。いたみががまんできなくて、「こんな足足りない。たのむからいたいのをなんとかして。」と、なきわめいたりやつあたりをして、母さんをずいぶんこまらせた。母さんはわたしにつきそうため、ぎょうしょうのしごとをやめていた。むくんだわたしの足を、母さんはいつもだまってさすってくれた。いたがるわたしを、ただみているしかなかった母

さんもつらかったとおもうが、そのときはじぶんのことでせいいっぱいだった。母さんにはわるいことしたとおもうし、かんしゃのきもちでいっぴいだ。

母さんといっしょにいられたのは、このわずかなきかんだけだった。しばらくしてわたしがうごけるようになると、母さんはびそうのしごとにつき、またいそがしくなった。てつやではたらくこともおおかった。

にゆういんせいかつはつらいことばかりだったが、足の手じゅつがおわって、おいしゃさんが「ほら、足がまっすぐになったよ。」とみせてくれたときはうれしかった。手じゅつごはいままでとかんかくがちがって、まっすぐあるくのがとてもたいへんだった。うまくあるけるようになるまで、ずいぶんじかんがかかった。

足の手じゅつがおわると、手くびもまがっていたので、おなかのいらぬほねをとって、手くびにつける手じゅつをした。手をつった

まま、まったくうごけない生かつがつづき、手だけでなくこしもいたくて、足の手じゅつよりももっとつらかった。じごくのようにゆういん生かつは一ねんほどつづき、ようやくわたしはたいいんした。

たいいんご、こんどはリハビリのため、かぞくとはなれてのぼりべつですごすことになった。二十五さいのときだった。わたしが学校にいていないことをして、リハビリのせんせいがひらがなをおしえてくれた。それまでわたしは、ひらがなもカタカナもまったくわからなかった。すう字のよみかたやとけいのみかたもよくしらななかった。そこではじめて字をならい、すこしだけおぼえた。でもかぞくとはなれてくらすのが、いやでいやでたまらなくて、いえにかえりたいとだだをこねた。母さんは「そんなからだでいえにかえってきても、なにもできないのにどうするの。とわたしをしかった。そういわれてとてもかなしかったが、ひっしでいいつづけて、とう

とうりハビリもとちゅうのまま、はんとしでいえにかえってきてしまった。母さんもしかたなしにゆるしてくれた。

わたしはじぶんをかえようとおもった。母さんにみとめてもらいたかった。とじこもってばかりいないで、みんなといっしょにふれあいたかった。母さんはわたしにいった。

「おまえは字がかけなくても、よめなくても、目と耳と口があるんだから、みて、はなして、わからなかったら人にききなさい。字がかけなかったら、かけないといって、人にかいてもらいなさい。はじをかくのはほんのちよつとのあいだなんだから。」母さんも学校にいていなかったので、字がかけなかった。だから、まわりの人に字やけいさんをおしえてもらいながらしごとをしていた。

わたしは字のかわりに、なんでも「え」をみてはんだんするようにした。それでもわからないときは人にきいた。ぎんこうにお金をおろしにいつでも、字がかけないので、ぎん

こうの人にたのんでかいてもらった。はじめはじぶんの字でないとだめだといわれたが、手がわるいといったらかいてくれた。字がかけないとは、はずかしくていえなかった。よみかきができないことが、ほんとうにくやしかった。

リハビリからもどってまもなく、わたしはおみあいをした。あいての人は目のみえない人だった。からだの不自由なわたしが、目のみえない人のせわをするのはむりだとおもっていたら、あいてのほうからさきにことわられてしまった。

わたしはがんばってそとにでるようにした。しょうがいしゃのサークルにさんかするようになり、友だちもできた。からだが不自由でがいしゆつするのがたいへんな人のボランティアもした。その人に「ぎんこうでお金をおろしてきて。」とたのまれたときはほんとうにこまった。おかねのおろしかたがよくわからなかったから。じぶんが学校にいったいな

いとはいえなかった。

二十七さいのとき、わたしは一人ぐらしをするけっ心をした。いつまでもおやにたよって生きていくわけにはいかないし、いつかはおやともわかれる日がくる。そのときになってから、きゆうに一人ぐらしをはじめるのはむずかしいし、きょうだいにふたんをかけるのはいやだった。母さんは大はんたいだった。でもわたしはじぶんのおもいをとおした。それまで、いえのことはほとんどわたしがやってきたので、かじをするのはこまらなかつた。それからずっと一人でくらししてきた。いまはかぞくがふえて、五ひきのねこといっしょだ。

一人でひっしに生きてきたので、ながいあいだべんきょうのことをかんがえるよゆうはなかつた。でもべんきょうしたいというきもちもちはきえなかつた。四十だいになって、べんきょうをおしえてくれるボランティアの人をしょうかいしてほしいと、くやくしょにたのみにいった。きんじょの人がこうたいできて

くれて、ひらがなやかん字をおしえてくれた。でもはじめてまもなく母さんがたおれたので、べんきょうがつづけられなくなってしまった。

しばらくたって母さんのじょうたいがおちついてきたので、またべんきょうをしたいとおもって、くやくしよにいった。そしたら、やかん中学があることをおしえてくれた。すぐにもうしこみしよをかいてもらい、えんゆうじゅくにけん学にいった。わたしはそれまであまり人まえにでたことがなかったので、ものすごくきんちょうした。だいひょうの工藤さんが、えがおでむかえてくれたのがうれしかった。あいうえおからべんきょうするとおもっていたら、その日はかん字のべんきょうだった。まったくわからないまま、あつというまにじゅぎょうはおわってしまった。けんじょうしゃばかりのところに、しょうがいのあるわたしがはいるのは、たぶんむりだろうとおもっていたら、にゆう学つうちがうちにとどいた。ほんとうにうれしかった。「つ

いにわたしも学校にいけるんだ。」そうおも
うと、きたいでむねがわくわくした。でもみ
んなのなかまにはいれるか、しんぱいだった。

えんゆうじゅくにはいっても、人の中にい
るだけでせいいっぱいで、わたしのあたまの
中はいつもパニックじょうたいだった。じゅ
ぎょうにまったくついていけず、せんせい
がなにをいっているのか、さっぱりわからな
かった。スタッフの井上さんがいつもとなりに
ついておしえてくれたが、となりに人がいる
だけできんちょうし、なにがわからないのか
もわからず、きくこともできなかった。いっ
しょうけんめいおしえてくれる井上さんに、
もうしわけないきもちでいっぱいだったが、
どうすることもできなかった。

なんどもえんゆうじゅくをやめようとおも
った。わかりたいのにまったくついていけな
い。ここにきてもわからないのかとおもうと
つらかった。じぶんにやるきがないからわる
いのだとおもった。どうしたらいいのかわか

らないまま、わたしはただひっしでえんゆうじゆくにかよっていた。

えんゆうじゆくにはいったよく年、母さんがまたたおれていしきがなくなった。きょうだいでこうたいでかんびょうしたが、母さんはいしきもどると、わたしのなまえをすぐよぶのでたいへんだった。わたしのあたまの中は、いつも母さんのことはいっぱいだった。いえでべんきょうしようとおもっても、せんたくやかいもの、母さんのかんびょうでつかれてしまって、なにもできなかった。わたしはかんびょうのつかれからか、たいりょうのちをはいてにゆういんした。げんいんはよくわからなかった。ひんけつがひどくて、ゆけつをしなければならなかった。にゆういん中も母さんは「おまえがかえってこないと母さんはこまる。」とあってわたしをたよりにしたのでこまってしまった。なんでわたしばかり、こんなにびょうきをしょわないといけないのだろうとおちこんだ。とけつはそのごも

たびたびあったが、母さんがなくなってからはぴたっととまった。きっと母さんがわたしのために、いっしょにびょうきをもっていってくれたのだろう。

母さんはにゆうたいいんをくりかえし、かいごするのがたいへんだった。とくによなかにくるまいすにのせて、トイレにいかせるのがひとくろうだった。えんゆうじゆくをやめて、母さんのかんびょうにせんねんしようかずいぶんなやんだ。でも、「せめてじぶんのなまえとじゅうしょだけでも、かけるようになりたい。」というおもいはすてきれなかった。わたしはなにもわからないまま、一年生をなんどもくりかえした。

二〇〇四年のはる、わたしはおもいきってじっくりコースにはいることにした。じっくりコースだったら、じぶんのしたいべんきょうをちゃんとおしえてくれるかもしれないとおもった。やるだけやって、それでもだめだったらやめようとおもった。おもうようにお

ぼえられなくて、くやしいおもいをするこ
とはなんどもあったが、じっくりコースではじ
ぶんにあったべんきょうができたし、ゆっく
りとくりかえしおしえてくれるので、えんゆ
うじゆくにくるのがたのしくなってきた。

二〇〇五年の六月、一ねんほどこんすいじ
ょうたいがつづいていた母さんは、よなかに
一人で天国へたびだってしまった。なくなる
ときにそばにいてあげられなくてくいがのこ
る。わたしに力があつたら、もっとしっかり
母さんのめんどうがみられたのにとおもうと、
くやしくてもうしわけなかった。母さんはこ
れまでたくさんのしれんをのりこえてきたつ
よい人だから、また目をさましておきあがる
とおもっていた。ぜったいに死なないとおも
っていた。母さんはいつもわたしのそばにい
てくれるはずだった。わたしは母さんの死を
みとめたくなかった。

母さんがいなくなってから、わたしはなに
をしてもはりがなく、ぬけがらになったよう

だった。リハビリに行くのもえんゆうじゅくにいくのも、もうやめようとおもった。リハビリのせんせいにそうはなすと、「いまここまできてやめたらこうかいするよ。やめるのはいつでもできるよ。」といわれた。わたしはこのままなにもしないと、じぶんがだめになるとおもって、またかようことにした。

たいせつな人がつきつきとなくなっていった。よく年、母さんの命日のよく日に、わたしをずっとささえてくれていたリハビリのせんせいが、びょうきでなくなった。いちばんしんらいしていたせんせいだった。そしてそのよく日には、わたしのなやみをよくきいてくれたおばさんもなくなった。ショックでなにもやるきがしなかった。そんなとき、えんゆうじゅくのスタッフに「フサ子さんはえんゆうじゅくでいったいなにがやりたいの。」ときかれた。わたしはなにもこたえられず、くやしかった。ほんきでえんゆうじゅくをやめようとおもった。でも、みんなにいまやめ

たらずだったいにこうかいするととめられた。わたしはじぶんをかえなくてはいけないとおもった。そのときはつらかったが、いまはやめなくてよかったとおもっている。おかげですこし大人になれたきとする。

それからわたしは、ほとんどやすまないでえんゆうじゅくにかよった。いつどうなるかわからないので、いけるあいだはなるべくやすまないようにしようとおもった。すこしずつ字もおぼえて、けいさんもできるようになって、べんきょうがたのしくなってきた。やすむのがもったいなくて、やすめなかった。

えんそくにもさんかした。みんながつくってきたおべんとうは、とてもおいしかった。クリスマスぼうねんかいでは、えいごのげきをしてたのしかった。わたしはしゅやくのピーチたろうをやった。いえでいっしょうけんめいセリフをれんしゅうしておぼえたのに、ほんばんではきんちょうしてセリフがなかなかでてこなかった。たのしいおもいでがたく

さんできた。

ことしの六月、またわたしにとってたいせつな人がびょうきでなくなった。まだ三十だ
いだった。わたしをおふろにいらしてくれたり、
いっしょにがいしゅつしたり、ときどきべん
きょうもおしえてくれた人だった。いっしょ
うけんめい字をおしえてくれたかのじょに、
ここでがんばって、てがみをかかなければと
おもった。へたでもいいから、じぶんの字で
てがみをかいてだそうとおもった。天国にい
ってしまったかのじょに、じぶんのおもいを
つたえたかった。

てがみをかきはじめると、びんせんに小さ
な字がかけた。じぶんがこんなにかけるとは
おもわなかった。わたしをささえ、字やパソ
コンをおしえてくれたりハビリのせんせいが、
天国からおうえんしていられたきがする。
ポストにてがみをいれるときはどきどきした。
くるまいすではポストに手がとどかなくて、
ちかくにいた人にたのんでいらてもらった。

じゅうしょもがんばってじぶんでかいたので、
だしたあと、ちゃんととどくか心ぱいだった。

「わたしにもてがみがかけた。」そうおもう
と、うれしくてうれしくてたまらなかった。
そしてじぶんにもできるのだと、じしんがつ
いた。

字をかくのがたのしくなった。なつやすみ
に、いままでてがみをだしたかった人たちに
てがみをかいた。じぶんがかいたてがみをも
ってゆうびんきょくにいくあいだ、しあわせ
で心がルンルンだった。てがみをだしたらみ
んなからへんじがきて、もどってきた一つ一
つのことばがまたうれしかった。

なんどもなんどもやめようとおもったが、
えんゆうじゅくをやめないでほんとうによか
った。これまでじぶんをささえてくれた人た
ちに、かんしゃのきもちでいっぱいだ。母さ
んも天国で、わたしががんばってべんきょう
しているすがたをみて、よろこんでいるにち
がいない。

いままではじぶんをさらけだすのがはずかしかった。つらいかこをおもいだすのもいやだった。だからじぶんのことをだれにもはなさず、ずっとじぶんの中におさえてきた。とてもくるしかった。でもださないとわかってもらえない。しょうがいしゃにたいするさべつやへんけんはまだまだなくなっていないし、わたしみたいに学校にいけなくて、べんきょうしたいとおもっている人もたくさんいるはずだ。わたしのようなおもいをしてきた人がいることをしってほしい。

生きるのはたいへんだけど、たのしいことはかならずくると、いまならいえる。つらいかこがあったからこそ、いまのじぶんがあるとおもう。なんども死のうとおもったが、死なないで生きてきて、ほんとうによかった。死ぬのはかんたんだ。生きてのりこえれば、たのしいことがきつくとくると、くるしんでいる人たちにつたえたい。

ずっとしたかったべんきょうができて、字

がかけるようになって、じぶんのことがはなせるようになって、いまが生きてきた中でいちばんしあわせだ。